大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

平田篤胤『靈宗仲景考』について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂出, 祥伸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004381

平田篤胤『毉宗仲景考』について

坂出祥伸

はじめに

平田篤胤（安永五年・一七七六～天保十四年・一八四三）には『志都能石屋講本』（『医道大意』文化八年・一八一一成）『毉宗仲景考』（文政一〇年・一八二七）『金匱玉函経解』（文久元年・一八六一、久保季茲（すえしげ）校正例言）の三種の医書の翻字されたものが『新修平田篤胤全集』（以下には『新修全集』と略記）第十四巻に収められているので、彼の医學著述は広く知られている。

医者としての篤胤がどうであったかは詳細な経歴は詳らかにし得ないが、今、主として養子鐵（かね）（銕）胤（たね）による「大壑君御一代畧記」（『玉たすき』附）によってたどっておく。

篤胤は、出羽国久保田城下の佐竹藩士大和田厳兵衛祚胤の四男、幼名正吉。

天明三年（八歳）、儒家中山青莪について漢学を学び始めるのと同時に鍼医桜井宗休の養子となる（十一歳まで）。天明六年（十歳）、叔父大和田柳元に従って医術を学び名を玄琢と称する。寛政七年（二十歳）、脱藩して江戸へ出る。享和元年（二十六歳）、初めて本居宣長の著書を読んで古学に志す。享和三年（二十八歳）、太宰春台の『弁道書』に反論して『呵妄書』を著わす。文化四年（三十二歳）、再び医師となり、名を元瑞と改める。蘭学を吉田長淑の蘭馨堂で学ぶ。文化六年まで。天保十二年（六十六歳）正月元日、幕府より一切の著述差し止め、国許への帰還を命ぜられる。同年十二月、病気の藩主の治療法を上申する。天保十四年閏九月、逝去。（文化六年ごろ、医師の業を廃止していたが、その間、二男の又五郎の疳病を治療している）

最初の著述『志都能石屋講本』については、すでに『人文学論集』（大阪府立大学人文学会）第三〇集（二〇一二年三月）に「平田篤胤の医書『志都能石屋講本』について」と題する小論で考察している。

本稿は第二の著述『靖宗仲景考』について考察しようとするのであるが、ところが、谷省吾『平田篤胤の著述目録』二十二頁によると、『靖宗仲景考』には二種類の刊本があり、一つは「『伊吹能舎先生著撰書目』を附録したもので、文政十年二月十五日の松浦道輔及び同年九月の伴信友の序を載せてゐる」といい、もう一つは、「同年十一月朔日の生田国秀の序文のみを有し、末尾に『伊吹廼屋先生及門人著述刻成之書目』といふ書名のみの出版目録一丁を合綴してゐるもの」という。(1)

しかし、『靖宗仲景考』の本文には関係がなさそうであるから、今は、『新修全集』第十四巻所収本によって検討することにする。

三つめの著述、『金匱玉函経解』は、久保季茲の「校正例言」にあるように、題名の別名として『傷寒雑病論約説』『仲景方論纂要』『傷寒論解』の三種もあるが、門人等慎記の「著撰書目」に従って「金匱玉函経解」としたとあることでも分るように『傷寒論』の解説書であって、宋代に林億等の校刊した『金匱玉函経』や『金匱要略』とは直接的な関係はない。

門人等慎記の「伊吹能舎先生著撰書目」によれば、「右傷寒金匱の正文を撰定し、次第を正して、本文と成し、病門を分ち、後、其の発揮せる説、また二書の有らゆる註を折衷して、分註となし、二書に足らざる方論の、千金外台を始め、他の古書に散見せるを拾ひて附記し、治療の活用を示されたる書なり」と解説されている。「右傷寒金匱の正文を撰定し」とあるのは、同書目の本書の前に、『金匱玉函経考文』二巻が記載されていて、これについて「傷寒論と金匱要略方とは、もと二書にして、漢土医方書の祖なること、世人の普ねく知れるが如し。然れども、後人の攙入説多く、未しき徒、その攙入文に眩惑して、その真旨を得ざる事を嘆き、和漢古今の諸説をも、用ふべきは用ひ、傷寒金匱を併せて、なほ章を追ひ、精しく論じ徴して、古名に復(かへ)されし物なり」とある解説を受けている。

『金匱玉函経解』三巻には、篤胤の按語のみならず、当時の古方派の医者である山田正珍（字・宗俊、号・図南）、吉益南涯（東洞の子）、中西惟忠（『傷寒論弁正』など）あるいは、多紀元簡（桂山）、和田東郭（『医説』『傷寒論正文解』）、名古屋玄医、目黒道琢（江戸医学館教授）、齋宮必簡（一木（いつき）齋）などの説が論証に引用されている。本書の意義は改めて検討すべきであろうが、今はとりあえず、医學館を中心とする医学考証派からの濃厚な影響が読みとれることを指摘しておくにとどめておく。

この『靖宗仲景考』が成る二年前に『葛仙翁伝』が書かれているのを始め、その前後には『五嶽真形図』『黄帝伝記』『大扶桑国考』『赤県太古伝』『三五本国考』『天柱五岳余論』『三神山余考』など道教に関わる著作が多い。これらには葛洪を始め同時期の道士の名、『抱朴子』からの引用が頻繁に出てくるので、本書は彼の道教への強い関心と無

関係ではないであろうと想像される。

ちなみに、書名の「靈宗」とは、靈者の大宗（おおもと）の意であろうが、この熟語は現今最も多くの語彙を集めている一九九四年出版の『漢語大詞典』には出てこないし、清朝・康熙帝勅撰の字典『佩文韻府』にも見えない。あるいは平田篤胤の造語であろうか。

一、『靈宗仲景考』著述の動機とその内容

養子鐵（銕）胤による「大壑君御一代畧記」（『玉たすき』附）の文政一〇年条に「靈宗仲景考刻成」と記されている。「刻成」とは、版本が出来上がったという意味であろう。当然、著述し終わったのである。

ところで、篤胤自身の述べるところによると、『靈宗仲景考』は実は、『志都能石屋』の中で論ずべきであった張仲景についての議論を「別本」に仕立てたもの、つまり、『志都能石屋』とは独立の書物とさせたというのである。この点は『靈宗仲景考』著述の意図を考える上で特に注意を要する。

文政八年八月十日、玉中春緒宛の書翰の中に、

志都能石屋の事御望の由、御尤もながら、段々考証多く相成候て真柱の末なる目録とは、大に相違の大部に相成候、真柱ほどの紙数にて、十巻余りは慥に有之候、（中略）右の内張仲景の考、当方門人共進メによりて、別本に仕立候を掛御目候（お目にかけ候）、

とある。「真柱」とは、『霊能真柱』を指す。(2)

この記述を補うものとして、「大壑君御一代畧記」文政一〇年条にも、「志都能石屋。巻数多キニ依テ、体載ヲ改メ分テ、数部と為玉ヘリ。」とあり、篤胤にとって医道は玄学の重要な一環であったことを、前記の谷省吾『平田篤胤の著述目録』一八頁に「巻数の増加したことが、医道を玄学の重要な一環として深く掘り下げようとしたかであることが、はっきりと解題の文章に示されてゐる」と鋭く指摘されている。その著述の動機について、篤胤自身の言説がある。『靈宗仲景考』の冒頭で、

傷寒雑病論、金匱要略方論の二書は、其の原本一ツにして、今在（あ）る傷寒論は、傷寒雑病論の雑病篇を佚せるもの、金匱要略方論はその傷寒篇を佚せる物なるが、古今億兆の医人、その方法に従事して、医薬の祖典と尊奉するに、その撰者を張機、字は仲景と伝へ来つれど、史籍にその伝なき事を誰も甚（いた）く遺憾に思へるに、此の頃その人を考へ得たり。（『新修全集』第十四巻五一六頁上）

と述べる。すなわち、今日伝来している『傷寒雑病論』と『金匱要略方論』とは、本来一書であったが、前者はそのなかの「雑病篇」の部分が脱落して失われ、後者は傷寒篇が脱落して失われたものであると見なし、その撰者として古くから張機、字を仲景という人物とされているが、実は史書に張機、張仲景の伝がないのを古来から疑問にされていたが、自分は、この撰者について探し当てられたというのである。

当時の古方派の医者の間での傷寒論尊崇の風潮が、篤胤の考察の背景にあり、彼自身も張機を特別視していたことは、『志都能石屋講本』の次の言説を見れば十分納得できる。

> 医者たる者の第一と学ぶべく法則にも致すべき傷寒論と申す医書がある、是れは実に医方書の祖(おや)たる、第一のめでたき物で、これを著(かか)れたるが、後漢の世の張機字は仲景と云賢き人で、是は戎人(からびと)ながらも、篤胤が常にその御霊のふゆを蒙って居るに拠って、御国の神に次では、額(ぬか)づき拝み居りまする。(『志都能石屋講本』四七一頁下)

と傷寒論と著者であるされている張仲景を極端に讃美尊崇している。ということは、篤胤は系譜的には吉益東洞、山脇東洋らの古方派につらなることをも意味しているであろう。

本書『畧宗仲景考』は実は傷寒論の実際の撰者は誰であるのかの一種の謎解きを行っているように思われる。門人等慎記「伊吹能舎先生著撰書目」によれば、

> 畧宗仲景考一巻刻成　此ノ書は、古今の畧人、傷寒雑病論、金匱要略方論を医薬の祖典と尊奉するに、其の撰者を張機、字は仲景と伝へ来つれど、史籍に其ノ伝なきことを遺憾に思へるに、此は葛玄、字ハ孝先と云ひし真人の寓名なる由を、諸書に徴して、委曲に考へ記されし物なり。

と説明されている。門人菅原道満・河内盛征等謹記「大壑平先生著撰書目」も同じである。

すなわち後漢時代の名医とされる張機、字は仲景が、史籍(『後漢書』などを指す)にその伝記がないのを遺憾に思っていたが、実は葛洪の従祖葛玄、字は孝先であり、この真人の寓名であろうと推測するに至ったと論じているのである。

ここで、今日の研究では、実在したかどうか定かではない張仲景と、また、江戸時代の古方派に尊重された『傷寒論』について、辞書的な一般通行の説明を与えておきたい。

張仲景は生歿年は不明であるが、後漢末(三世紀初)の人で、名は機、字が仲景で、長沙の太守となったと伝えられている。しかし、現

存の史書にその伝記は見当たらない。『傷寒論』と『金匱要略』の著者とされている。

『傷寒論』は正しくは、『傷寒卒病論』といい、臨床的な治療方を説いていて、『黄帝内経素問』とか『霊枢経』のような理論書とは異なる。傷寒というのは、狭義では頭痛、悪寒、身疼などの症状で、風邪によることが多い。広義では、外感熱病すなわち高熱、心煩、面紅、脈数（みやくさく）のような症状を指す。一言で簡単にいうと急性熱性疾患である。後漢末の張仲景の撰で、晋初に王叔和によって再編されたといわれるが、確証はない。傷寒の経過を太陽、少陽、陽明、太陰、少陰、厥陰の六期に分けて、各時期の種々の病状と、それに応じた薬物療法を論じている。湯液が多く用いられている。

篤胤は本書『暨宗仲景考』で張仲景とは、葛洪の従祖父（いとこおじ）・葛玄、字・孝先、號は葛仙翁と推定している（父の兄弟は従父、さらにその父が従祖父）。葛玄の弟の子が葛奚で、葛洪の祖父になる。その子が葛悌、すなわち葛洪の父である。

葛玄について、『晋書』巻七十二葛洪伝には、

> 従祖玄、呉時学道得仙、号曰葛仙公、以其錬丹秘術授弟子鄭隠。洪就隠学、悉得其法焉。後師事南海太守上党鮑玄。玄亦内学、逆占将来、見洪深重之、以女妻洪。洪伝玄業、兼綜練医術。

従祖玄、呉の時道を学んで仙を得、号して葛仙公と曰い、其の錬丹の秘術を以て弟子の鄭隠に授く。洪隠に就きて学び、悉く其の法を得る。後南海太守上党の鮑玄に師事す。玄も亦た内学あり、逆（あらかじ）め将来を占い、洪を見て深く之を重んじ、女を以て洪に妻わす。洪、玄の業を伝え、兼ねて医術を綜練す。

とある。さらに、『抱朴子』内篇・金丹篇には、左元放について、

> 昔左元放於天柱山中精思、而神人授之金丹仙経。会漢末乱、不遑合作、而避地来渡江東、志欲投名山以修斯道。余従祖仙公、又従元放受之。凡受太清丹経三巻及九鼎丹経一巻金液丹経一巻。余師鄭君者、則余従祖仙公之弟子也、
>
> 昔左元放天柱山中に於て精思して、神人之に金丹の仙経を授く。漢末の乱に会い、合作するに遑あらず、而して地を避けて来りて江東に渡り、志して名山に投じて以て斯の道を修せんと欲す。余が従祖仙公も、又た元放に従いて之を受く。凡そ太清丹経三巻及び九鼎丹経一巻金液丹経一巻を受く。余が師鄭君は、則ち余が従祖仙公の弟子なり。

と説明されている。葛洪の『神仙伝』には、「左慈、字元放、廬江の

人なり、五経に明かるく、兼ねて星気に通ず」とあり、また、『後漢書』方術伝によると、「少くして神道有り」であったという。

ところで、葛玄についての生歿年は、篤胤によると、「呉の大帝の赤烏七年（二四四）八月に、八十一歳にて仙去」したとし、この年から逆算すると、（後）漢・桓帝延憙七年（一六四）の生れ」（『鑒宗仲景考』五三二頁上）の人だとする。篤胤が拠り所としたのは、薛大訓纂輯『古今列仙通紀』巻十七「葛仙翁」の記述であろう。『鑒宗仲景考』には、略称としての『通紀』という文字がしばしば見られる。

なお、前引の「著撰書目」にいう「真人」とは、『素問』上古天真論篇あるいは『荘子』大宗師篇にいう養性者としての「真人」ではなく、また、『晋書』葛洪伝にいう道を学んで仙を得たという場合の「真人」であるよりは、端的には『古今列仙通紀』巻十七葛仙翁によると、葛玄が南宋・徽宗の崇寧三年に、「沖応真人」に封ぜられたとされたと記されている場合の「真人」ではなかろうか。

二、これまでの本書『鑒宗仲景考』への論評

本書についての論評には、これまでに龍野一雄（一九〇五～一九七六）「傷寒雑病論の成立―（大陸医學序説の内）」（一）（二）、服部敏良（一九〇六～一九九二）『江戸時代医学史の研究』第四節「平田篤胤の医学」、丸山敏秋（一九五三～）「平田篤胤と医学―医道観と張仲景『傷寒雑病論』の認識―」がある。以下には、これら三論文の梗概を示しておく。(3)

龍野論文：先ず、葛孝先説の論旨を要約し、（一）金匱薬方百巻と玉函方は同一として金匱玉函方とも称した。（二）「肘後備急方序」に仲景の金匱とあるが、葛洪の金匱薬方はこの書名を借りたもの。王叔和は葛洪の金匱玉函方を刪繁して金匱玉函要略方を著わした。（三）従祖父・葛玄（孝先）→祖父・葛奚→父・葛悌→葛洪に至る血縁関係を図示している。（四）葛孝先の存命中に大疫が流行し、それを建安紀年よりいまだ十稔経たない頃であったろうということ、神仙家はしばしば変名するから葛孝先も張仲景と変名したであろうという推測。さらに葛孝先は「戴覇とも仲景とも張機字は仲景とも数名を称し、漢長沙守とさへ寓言」した。以上のようにまとめた論旨に対して、（イ）から（ニ）まで四点の反論を挙げている。（イ）葛孝先が張仲景と同一人だという確たる根拠が示されていない。神仙家は変名を使うから孝先も張仲景と変名したのだろうというだけでは意味をなさない。（ロ）孝先は丹陽句容の人だが仲景は南陽の人である（現行傷寒論序文末に南陽張機とある。南陽は川蜀の地である）（ハ）仲景の金匱が葛洪の金匱薬方あるいは金匱玉函方の名称のもとづくところではあろうが、それは名称だけのことであり、「内容的に近いものという証明

がされていない」。また、王叔和は葛洪の金匱薬方あるいは玉函方百巻を刪繁して金匱玉函要略方としたというが僅か三巻に要略できるはずがないし、王叔和が要略したという推測も疑問である。（二）『晉書』葛洪伝、『抱朴子』外篇自叙によって調べてみても仲景または仲景を思わせる記事はないし、『抱朴子』内篇・至理篇には「仲景穿胸以納赤餅、此医家之薄技、猶能若是、豈況神仙之道、何所不為」（仲景胸を穿ちて以て赤餅を納る、此れ医家の薄技、猶ほ能く是の若し、豈に況んや神仙の道、何の所か為さざらん）とあって、医家を軽んじ神仙家を称揚しているが、これは貴重な金匱書を継承したにしては矛盾している。葛洪が師伝を軽蔑（ないがしろ）にすることは考えられない。「至理篇」には理中湯、建中湯という『傷寒論』に見えるのと同じ湯薬が出ていることについて「葛洪の時代にはすでに仲景の方書も流布している」「理中、建中が仲景が初めてつけた名称なのかどうか証明できない」のであるから、葛洪と仲景とに緊密な関係があるとは言えない。

以上の理由で仲景・孝先同一人説を否定している。

続く「傷寒雑病論の成立」（二）は、「張仲景考」と題して、仲景の伝記、治療、著述、医説を論じている。伝記では、その第一の資料として、「傷寒論序」に、

> 張仲景、漢書無伝。見名医録云、南陽人、名機、仲景乃其字也、挙孝廉、官至長沙太守、始受術於同郡張伯祖。時人言、識用精微、過其師、（張仲景、漢書に伝無し。名医録を見るに云う、南陽の人、名は機、仲景は乃ち其の字なり、孝廉に挙げられ、官長沙太守に至り、始めて術を同郡の張伯祖に受く。時人言う、識用精微、其の師を過ぐと）（4）

とあるのを引用する。

これによって、機という人物と仲景という人物が存したこと、おそらく同一人であろうと推測する。次いで、生年、歿年ともに不詳であるが、活躍した時代について、後漢の建安頃（「傷寒卒病論集」序に「建安紀年以来、猶未十稔」とある）、後漢の献帝の時代で二十五年続いた（一九六～二二〇）、皇甫謐の「鍼灸甲乙経序」にある張仲景が二十余歳の王仲宣を見て、四十で眉が落ち、その半年後に死ぬが、五石湯を服すれば免れると言ったというエピソードを検討して、張仲景は建安二年に仲宣を診療した、使った処方は五石湯である、診察の方法が予言的である、という結論に導いている。治療については、後世の明代の『本草綱目』に見える張仲景とされる治験例を掲げている。著述については、『傷寒論』『金匱要略』のほかに『張仲景方』十五巻を挙げて、その佚文を『太平御覧』『医心方』に引かれる「張仲景方」を列挙している。最後に、仲景の医説と題して、仲景は湯液家に属するので、鍼灸には深く立ち入らなかったこと、また、気血に三等があり、

これに応じて治方も三等に分つべしとの論があるなどと述べている。

服部論文：「平田篤胤の医学」と題されていることでも分るように、医師としての篤胤の活動が主要な内容であり、江戸在住期と秋田での医療の事蹟を書翰などを通じて詳しく紹介している。なかでも興味深いのは、病気であった藩主の治療を御側医師から依頼され、その治療方の医案を上申するのであるが、その内容に、「中世以来は医道の古道相廃レ、右様の病証ニ、祝由禁厭の術相兼候事無之候へ共、若シ夫等の儀御用にも候はゞ、粗相弁へ居候儀も御座候間、如何にも被仰付次第、相修可奉指上存候」とあって、さらに篤胤が実際に藩侯の病気平癒の祈禱を行った点にも着目している。第四項で医書を取り上げ、『志都能石屋』を主に取り上げて、「本書は篤胤の医学を代表する医書」であり、その提唱する「皇朝医学」は「広い世界観と深く広い見識を持ち、外国医学といえども、必ずしも、これを排撃することなく、その長をとり、わが国医学の短を補い、医療の完璧に力をつくすことを医師の本分として強調している」と評している。『靈宗仲景考』については、「内容は『傷寒論』『金匱要略方論』を検討し、現存の『傷寒論』は『傷寒雑病論』中の『雑病篇』を除いたもの、『金匱要略方論』は同書から『傷寒論』を除いたものである。著者についてこれまでは張機、字を仲景と伝えているが、その経歴・略伝は従来全く不明であった。このため篤胤は『晋書』列伝の中に葛洪（稚川という）の伝があり、その著に『金匱薬方』百巻、『肘後要急方』四巻のあることを知った。……この稚川こそ『傷寒論』の著者であるとしている。……神仙道のものは、その法を守って、実名を顕わさず、寓名を用いるのが常であり、稚川も実名を名乗らず張機あるいは仲景と称した。したがって、『傷寒論』の著者は仲景なりとされていたのである」と説明している。しかし、ここは服部氏の全くの誤解である。仲景＝葛洪ではなくて、仲景＝葛玄（孝先）である。『金匱玉函経解』については、篇名を掲げているだけであり、内容の検討はされていない。

丸山論文：副題「医道観と張仲景『傷寒雑病論』の認識」から推測されるように、国学者としての篤胤の医道観は、「皇国太古の医道を本とする汎神道主義的世界観」であるとみなし、仲景を「神医の類とあつく敬った」。さらに篤胤は、張仲景に確かな伝記的記録がないことに着目して『靈宗仲景考』を著わして、この謎に挑んだ。そこで結論的には仲景＝葛孝先という新奇な説を提示した。その立論は主として三つの資料に依拠しているとして、『晋書』葛洪伝の従祖葛玄の得仙、葛仙公の号などの記述、『抱朴子』内篇・雑応篇に見える百巻の玉函方などの記述、さらに、やはり葛洪の著述『肘後備急方』に附された「葛洪肘後備急方序」にも同様に百巻の玉函方の記述が見えることから、「戴覇と仲景は同一人物と推定され、葛洪『金匱玉函方』の原本は、この仲景（戴覇）の著わした『金匱』に他ならない」と推

論したのだという。ついで篤胤は、仲景＝葛孝先の説を、葛孝先はしばしば変名を名のる神仙家であるからという根拠で主張する。丸山氏の論評で興味深いのは、「太古の大名牟遅（ママ）・少彦名の二神が起こした呪術的医療は漢土に伝播して神仙家の方術と一体になり、漢方医学が発生して、『傷寒論』の如き卓越した医方書の著者は神仙術をよく修めた者に違いない。このような考え方に立って張仲景なる人物を歴史に求めたとき、葛洪及びその従祖である葛孝先の存在に行きついた」と理解されている点である。さらに丸山氏は、『醫宗仲景考』の「考証ぶりの執拗さ」に驚かされるといい、本書末尾の附録で多紀元簡の『金匱要略輯義』を批判しているのに注意して、「国学者流の考証で鍛えあげた篤胤の面目躍如たる趣きがある」と評している。この点は後で述べるが、医学館を中心とする医学考証派からの影響であろう。続いて、『金匱玉函経解』の内容を詳細に解説している。

これら三人の論評を承けて、小曾戸洋は『日本漢方典籍辞典』で『醫宗仲景考』を取り上げて、「この書は博学者らしく広く資料を援用してはいるが、張仲景を葛孝先（葛洪の曽祖父の兄という）と同一人物とし、葛孝先は戴覇とも仲景とも機とも称したという結論に達している。むろんこれは根拠を欠く奇説・妄説であり、信用するに足りない」と全面的に否定している。(5)

以上の四人の論評の中で、丸山氏の他は医学部あるいは薬学部出身の医史学者である。医史学の立場からすれば、仲景＝葛玄（孝先）の誤りを論証し指摘すれば事足れりであり、その範囲内で推論は終わっていいのであり、「根拠を欠く奇説・妄説」として切捨てて差し支えないのである。

しかしながら、丸山氏のように、倫理学出身の立場、すなわち思想史の立場から『志都能石屋』『醫宗仲景考』を取り上げるなら、「太古の大名牟遅・少彦名の二神が起こした呪術的医療は漢土に伝播して神仙家の方術と一体になり、漢方医学が発生して、『傷寒論』の如き卓越した医方書の著者は神仙術をよく修めた者に違いない。このような考え方に立って張仲景なる人物を歴史に求めたとき、葛洪及びその従祖である葛孝先の存在に行きついた」と述べるような理解には共感を覚える。

三、隠された真の意図を解く

ところで、篤胤の張仲景＝葛玄（葛仙翁）説は以下のような論点にまとめられるであろう（おおよそは前掲の龍野一雄氏の論文にもとづく）。

（一）『晋書』葛洪伝に見える「金匱薬方一百巻」は『抱朴子』雑応

篇および「葛仙翁肘後備急方序」に見える玉函方（「凡為百巻曰玉函」）と同じものであり、この二名を合して金匱玉函方とも称した。（『醫宗仲景考』五一九頁上下、五四一頁上）

（二）「葛仙翁肘後備急方序」に「仲景の金匱」とあるが、『晋書』葛洪伝の「金匱薬方一百巻」とはこの仲景の金匱という書名を借りてつけたものである。さらに、葛洪の金匱玉函方を後世の晋初の王叔和が繁雑な部分を削除して金匱玉函要略と名づけたのである。（『醫宗仲景考』五一九頁上下）

（三）葛玄の弟子に鄭隠、字思遠という神仙があり、葛洪はこの鄭思遠に事えて学んだ。また、葛玄の弟子に鮑玄がいる。葛洪はこの鮑玄についても学び、しかもその女を娶っている（『醫宗仲景考』五三三頁上）。

（四）葛玄の存命中、大疫が流行したが、それが建安年間のことだとする。「（抱朴子）内篇道意の巻に、呉の太帝が時のことを記して、呉曾有大疫、死者過半とも有り。孝先翁は、太帝が招請をうけて、其の頃かしこに留まりて在りしかば、建安紀年より、其の大疫の年までに、その宗族の多く疫にて死たりけむを、未十稔云々と云へりと聞ゆ、是をもて下文に、感往昔之淪葬云々、と語を結べるなり、甚よく符へるに非ずや」（『醫宗仲景考』五二九頁下）と。これは張仲景の『傷寒論』序文に「余宗族素多、向餘（盈）二百。建安紀年以来、猶未十稔、其死亡者、三分有二、傷寒十居其七、云々」（余が宗族は素と多く、二百になんなんとす。建安紀年以来、猶ほ未だ十稔にならざるに、その死亡せる者、三分に二を有し、傷寒は十の其の七に居る、云々）との傷寒論著述の動機が述べられているのに対応させているのである。（原文「餘」は衍字とも考えられるが本稿後注（6）所引書によれば、「みたんとす」と訓ずる）

（五）神仙家はしばしば変名するから、葛玄も張仲景と変名したであろう。例えば『神仙伝』によると老子は数名を称している。そこで、「神仙の道に、実名を秘して、寓名を称する法ある事を弁ふべし」という。（『醫宗仲景考』五二八頁上）神仙家の変名の理由は、「陰徳を行ふ神仙道の本意」であったという。そこで名を変えて「寓名」を用いたから、後世の人々は根拠のない伝記を作って今日に至っているという。「稚川翁すなはち其の法を守りて、其の実名を顕さず、其の寓名を用ひて、戴覇とも仲景とも称へりし故に、後人ら據もなき伝を作り、建安紀年より、今吾が文政九年まで、千六百まり数十年、その実名陰徳の顕れずぞ有りける」（『醫宗仲景考』五三四頁下）

なお、右のような篤胤の考証の多くは、実はすでに同時代の水戸の

原南陽（宝暦三・一七五三～文政三・一八二〇）が著わした『叢桂偶記』巻一「張仲景」、江戸医学館の多紀元胤（もとつぐ）らの『医籍考』巻二十三「張仲景傷寒卒病論（新唐志十卷）」についての考論末に附された元堅による長文の按語にもとづいている。また、他に田宮仲宣の随筆『嗚呼矣草（おこととぐさ）』（文化三年刊）からも資料を得ている。（7）

つまり、『傷寒論』の撰者とされる張仲景についての疑問が篤胤に始まるのではないということと、篤胤の創見と言えるのは、それを葛玄の撰とした点にあるのである。

以上の五点のほかに、私は篤胤にとり、より重要で、より切実な論点があると考える。すなわち、「神医道」の実現を論じている点である。（7）

篤胤は「志都能石屋とは、予の殊に神医道の淵源を論（あげつら）へる書（ふみ）の名なり」（『醫宗仲景考』五二五頁上）と『志都能石屋』著述の意図を明らかにしているが、『醫宗仲景考』が前述のように本来『志都能石屋』と一体の著述であることからすれば、この神医道の淵源を論ずるという主張は共通しているのである。とすれば、つまりは『志都能石屋』で説かれている神皇産霊大神（かみむすびの）が創始し、大穴牟遅神と少彦名神が継承した「皇国の医薬方術」の復活と実現こそが『志都能石屋』『醫宗仲景考』の両書で最も主張したかった内容であった。そういう主張の前提として、神医道の伝播した唐土で、医薬が神仙の伝えたものだという論拠を得ておこうとするのである。

『志都能石屋講本』によると、この我が神医道の創始と展開変遷は次のようだという。

> さて医薬の道は、神皇産霊大神（かみむすびの）より初まり大穴牟遅少彦名神の御受継なされ、なほ広く御撰み有て、此御世より、万国へまでも御伝へ遊ばされたること、見えまする」（『志都能石屋講本』四四三頁下）

我が国の医術は、神皇産霊大神が創始し、大穴牟遅神と少彦名神が継承しただけに止まらず、それが諸外国へも伝播したと主張している。なお、ここで注意しておきたいのは、篤胤がわざわざ『書紀』神代巻に大穴牟遅神と少彦名神とが、「療病之法」（くすりやまひのみち）とともに「禁厭之法」（まじなひののり）を創始したことを指摘している点である。

篤胤は、神仙の道は二つあり、一つは方術（仙術）であり、それは未病を治すものであり、もう一つは医療であり、それは已病を治すものであって、この両者は表裏一体をなすものと考えていたのであるが、このような理解の根拠が右のような「療病之法」「禁厭之法」に始源しているのであろう。

その後、漢土の医薬が伝来して皇国本来の医薬が衰微するようになり、漢土に医薬が隆盛するようになって現今は慨嘆に堪えないという。

仁徳天皇の大御代頃より初めて、次々に漢人ども多く参来り、書籍ども貢奉り、又此方よりも彼の国の物学びに、大御使を遣はされなど有て、種々のこと、医薬方術、及び其書とも、伝はり来て、人々其を珍らしく思ふに付ては、いつとなく皇国の方は粗略になり、（中略）人人次第に漢意に移り行て、終には皇国の医薬方術をば、重んぜざること、成たるは、甚以て慨く憤ろしきことでござる。（『志都能石屋講本』四四三頁下）

ところが、「然るに近頃、わが古学の興りたるより、此道も開け初て、漢方に依らず医療を為す者も、かつかつ出来たるは、然すがに神の御国の印にて、いとも愛たきことでござる。」（『志都能石屋講本』四四四頁上）という。

つまり、近年、古学の興隆とともに、皇国本来の医薬の道が再興しつつある趨勢を迎えて喜んでいるのである。

むすび

以上と同様の論旨を『醫宗仲景考』でも同工異曲に繰り返して述べている。(8)

（傷寒論、金匱玉函経などに載せられる）方論は悉く諸神仙の所造を伝来せる物なり。然るは、上に引きて論へる、今の金匱要略方論に、仲景の金匱云々と有る稚川翁の小序に、凡此薬石ハ者、是レ諸僊之所レ造ル也云々と記せるを以て、諸神仙の方論を集記せること著し。かくて其の諸仙の方論は、孝先翁の師左元放まで、次々に伝へ来つるを、受けたるが多かるは、言ふも更なるが、かく論ふは、稚川翁の内篇遐覧の巻に、其の師鄭子より受けたる書目を多く挙げたる中に、治百病経、行気治病経、按摩経、導引経、服食禁忌経などを初め、医経の口訣と聞ゆる書名の多きは、鄭子これを孝先翁に受け、孝先翁はこれを、左元放に受けたりと所思ゆればなり。其の元放は、頭界の師にこそ有れ、なほ幽界に入りて、老子を始め、数の神仙に出会して、道を問へること通紀に見え。（『醫宗仲景考』五三五頁上下）

先ず、医薬の書は葛仙翁などの神仙が伝えたものであり、篤胤の称

する「神医道」とは、神仙の伝えた医道にほかならない。そこで、皇国本来の医薬方術が近年復興しつつあることを喜んでいるのである。

> 其の伝ふる道の、我が大神の道より出て精に入り、其の功業また、神の古道に因循せるが故に、此を取れり
> 余や苟くも神の古道を講明するを以て自任じ、一部の医門断定の書をも作りて、後来の医を為す者に、医道の淵源を知しめんと欲すれば、固より然る凡見に拘はる事なし。（『靈宗仲景考』五四七頁下）

つまり、大穴牟遅・少彦名の二神が起こした皇国の神医道が漢土に伝わって、神仙・左元放に受け容れられ、鮑玄に伝授され、さらに葛玄に伝授され、ついに葛洪へと伝えられた方論であった。繰り返しになるが、ほぼ同時期に『葛仙翁伝』を始めとして『五嶽真形図』『黄帝伝記』『大扶桑国考』『赤県太古伝』『三五本国考』『天柱五岳余論』『三神山余考』など、道教ないしは神仙思想に深く傾斜した著述を矢継ぎ早に著わしていることを思い合わすべきであろう。しかも葛玄は、「葛仙翁」と称して崇敬してやまない葛洪の従祖であり、得仙した真人、つまり神仙である。神仙道は我が古医道の始原である。これこそ、篤胤がなぜ葛玄の名を持ち出すのかという真の理由であろう。

私は前稿「「平田篤胤の医書『志都能石屋講本』について」の結論として、篤胤が「最も眼目としているところは、我が国の医薬方術は、オオナムチ、スクナヒコ二神に始まる神医道と称すべきものであり、古方、後世の医術の区別なく、医道が神仙より発しているのだと主張したかったのであろう」と論じたが、実際、『靈宗仲景考』の眼目もまた、全く同様であるこれを再び強調したい。

註

（1）谷省吾『平田篤胤の著述目録』（皇學館大學出版部、一九七六）二十二頁。

（2）渡邊金造『平田篤胤研究』（鳳出版、一九七八再版）八八三頁。

（3）龍野一雄（一九〇五～一九七六）「傷寒雑病論の成立―（大陸医學序説の内）」（一）（二）（『漢方と漢薬』第六巻七号、八号、一九三九）。
服部敏良（一九〇六～一九九二）『江戸時代医学史の研究』（吉川弘文館、一九七八）第四節「平田篤胤の医学」、もと『皇學館論叢』第五巻第四号、一九七二）。
丸山敏秋（一九五三～）「平田篤胤と医学―医道観と張仲景『傷寒雑病論』の認識―」（『漢方の臨床』第三十巻第十二号、第三十一巻第一号合併号、一九八三）

（4）高保衡・孫奇・林億等進撰『傷寒論』（『註解傷寒論』人民衛生

出版社、一九五六）所収の「傷寒論序」。なお、文中の「名医録」とは、『宋史』芸文志子部医書類に著録の「甘伯宗歴代名医録七巻」、あるいは、『新唐書』芸文志丙部医術類に著録の「甘伯宗名医伝七巻」とあるのに相当するのかも知れないが、今は逸書となっている。

（5）小曾戸洋『日本漢方典籍辞典』（大修館書店、一九九九）

（6）郭靄春・張海玲編著『傷寒論校注語訳』（天津科学技術出版社、一九九六）二頁に「向余、孫注：《広雅・釋詁四》余、盈也。」と注しているのが参考となる。孫とは孫世揚『傷寒論字詁』を指す。

（7）『叢桂偶記』は今、『近世漢方医学書集成』第十八巻所収、（名著出版、一九七九）、『医籍考』は今は中国人民衛生出版社から『中国医籍考』と改題され索引を附したものが、一九五六年以来版を重ねている。『嗚呼矣草』は、『随筆文学選集』（書斎社、一九二七）第二巻所収。

（8）以下の論述は、吉田麻子『知の共鳴　平田篤胤をめぐる書物の社会史』（ぺりかん社、二〇一二）第一部第二章「越後の平田国学―平田銕胤の越後巡遊と『医宗仲景考』」から多くの示唆を得た。